# アブラハムの物語（3）

アブラハム 100 歳、サラ 90 歳のとき、ようやく神の約束は実現し、二人に子どもが与えられました。イサクです。一家には喜びと笑いが満ちました。イサクが 3 歳になったとき、アブラハムは乳離れを祝って盛大な祝宴を開きました。長い年月にわたる困難と波乱を経て、族長家族に平穏で幸せな日が訪れたかのようでした。けれども平和は長く続きませんでした。アブラハムの語りを聞くことにしましょう。

## ハガルとイシュマエルの追放

イサクのかわいさはわたしには特別なものでした。どんなものでも与えてやりたいと思ったし、この子のためならどんな苦労をしてもかまわないと感じました。

兄のイシュマエル、わたしがサラの女奴隷ハガルに産ませたイシュマエルはもう 10 代半ば過ぎになっていました。この兄弟のことで問題が起こったのです。

サラが、イシュマエルがイサクと遊び戯れているのを見て、わたしにこう言ったのです。

**「この女奴隷とその子を追い出してください。この女奴隷の子が、私の子、イサクと並んで跡を継ぐことはなりません。」創世記 21:10**

サラには、イシュマエルがイサクをからかったりいじめたりしているように見えたのでしょうか。年上のイシュマエルが、イサクにとって代わって、あるいはイサクと並んで家の跡継ぎになろうとしていると思えたのでしょうか。サラは、ハガルとイシュマエルに対する嫌悪と憎しみに燃え上がっていました。その名前を口にするのも不愉快という状態です。

わたしは困惑しました。イシュマエルもわたしの子どもなのです。ハガルとイシュマエルに特別罪があるとは思えません。けれどもこのことでサラはいきり立っており、一日として心の安まる時はありませんでした。わたしが少しでもサラを宥めるようなことを言えば、怒りに油を注ぐ結果となりました。これが神の祝福と導きを受けてきたはずの、わたしたちの行き着いた果てなのか。わたしはどうすることもできず、一日一日が耐えがたい苦しみでした。このままでは一家が破滅しそうです。

そうしたとき、神はわたしにこう言われました。

**「あの子と女奴隷のことでつらい思いをすることはない。サラがあなたに言うことは何でも聞いてやりなさい。イサクから出る者があなたの子孫と呼ばれるからである。しかし私は、あの女奴隷の子もまた一つの国民とする。彼もあなたの子孫だからである。」**
21:12-13

ハガルとイシュマエルを家から追放する。人として許されないことではないか。けれどもそれしか道はない。神が言われたとおりにするしかありません。

わたしは朝早く起きて、パンと水の革袋を用意してハガルに与え、それを肩に負わせました。そしてイシュマエルと共に送り出しました。何という冷酷なことでしょう。二人は荒れ野で生き延びることができるのでしょうか。しかし神が、イシュマエルもまた「一つの国民とする」と言われた以上は、二人の安全とその将来を守ってくださるはずなのです。

このことの責めを負うのはわたしです。しかし神も、その責めをみずから負ってくださったのだと思います。

## イサクを献げる

その後、年月が経って、平穏が訪れ、わたしがいっそう老いるとともに、イサクをかわいく思う思いが募りました。一家一族のことは忠実な僕エリエゼルにまかせ、わたしはイサクと一緒に過ごす時間が長くなりました。溺愛と言われても間違いではありません。イサクと一緒にいるときもいないときも、イサクの名を呼び続けている自分に気づきました。そして正直に言えば、神を忘れるようになっていました。もちろん朝の祈り、夕の祈りは守っていましたが、かつての切実さは失われ、形式に流れるようになっていました。わたしにとっての第１はイサク、第２もイサク、第３もイサク。神さまは４か５かそれ以下になってしまっていました。今から考えれば、わたしは信仰の道を踏み外していたと言わなければなりません。

そうしたある日、神がわたしの名を呼ばれました。「アブラハムよ」。わたしは「はい、ここにおります」と答えました。もう何年も神さまの声を聞くことがなかったし、聞こうともしていなかったので、内心ドキッとしたのは事実です。

**「あなたの息子、あなたの愛する独り子イサクを連れて、モリヤの地に行きなさい。そして私が示す一つの山で、彼を焼き尽くすいけにえとして献げなさい。」**22:2

わたしの心は凍りつきました。沈黙のみがわたしの状態でした。

わたしは朝早く起きてろばに鞍を置きました。二人の従者と息子イサクを連れて、焼き尽くすいけにえに用いる薪(たきぎ)を割りました。そして神が示された場所へと出かけて行きました。三日目になって、わたしが目を上げると、遠くにその場所が見えました。

アブラハムはここまで言うと口を閉じました。これ以上話すのは困難なようなので、聖書協会共同訳から続きを引用します。

「アブラハムは従者に言った。『ろばと一緒にここにいなさい。私と子どもはあそこまで行き、礼拝をしてまた戻って来る。』アブラハムは焼き尽くすいけにえに用いる薪を取って、息子イサクに背負わせ、自分は火と刃物を手に持った。こうして二人は一緒に歩いて行った。イサクが父のアブラハムに、『お父さん』と呼びかけると、彼は、『息子よ、何か』と答えた。そこでイサクは、『火と薪(たきぎ)はここにありますが、焼き尽くすいけにえにする小羊はどこですか』と尋ねた。するとアブラハムは、『息子よ、焼き尽くすいけにえの小羊は神ご自身が備えてくださる』と答え、二人はさらに続けて一緒に歩いて行った。」創世記 22:6-8

「神が示された場所に着くと、アブラハムはそこに祭壇を築き、薪を並べ、息子イサクを縛って祭壇の薪の上に載せた。アブラハムは手を伸ばして刃物を取り、息子を屠(ほふ)ろうとした。すると、天から主の使いが呼びかけ、『アブラハム、アブラハム』と言った。彼が、『はい、ここにおります』と答えると、主の使いは言った。『その子に手を下(くだ)してはならない。何もしてはならない。あなたが神を畏れる者であることが今、分かった。あなたは自分の息子、自分の独り子を私のために惜しまなかった。』」22:9-12

「アブラハムが目を上げて見ると、ちょうど一匹の雄羊がやぶに角(つの)を取られていた。アブラハムは行ってその雄羊を捕らえ、それを息子の代わりに焼き尽くすいけにえとして献げた。アブラハムはその場所をヤハウェ・イルエと名付けた。それは今日、『主の山に、備えあり』と言われている。」22:13-14

-

レンブラント「アブラハムの燔祭」1635

アブラハムは再び口を開いて言いました。

神さまはむごいことをなさった。けれども神は、初めからわたしにイサクを殺させるつもりはなかったのです。わたしはイサクかわいさのあまり、イサクをすっかり自分のものにしていました。神から授かったものであることを忘れていました。同時に、神を忘れ、信仰の道を踏み外していました。神から授かったもの。それは神のものだから神に返すように、神は要求された。神はわたしを試練に遭わされたのです。その時のわたしの苦しみは言葉にはできません。

わたしが神に従ってイサクを神におささげしたとき、神はイサクを祝福とともにわたしにもう一度与えてくださった。わたしの信仰は命を吹き返し、わたしは主に仕える者として建て直されました。35年前、最初に主がわたしを呼ばれたときから始まった本来の道に、わたしは戻ることができました。あのモリヤの山でイサクに代えて雄羊を主にささげたとき、主はこう言われました。

**「私はあなたを大いに祝福し、あなたの子孫を空の星のように、海辺の砂のように大いに増やす。……地上のすべての国民はあなたの子孫によって祝福を受けるようになる。あなたが私の声に聞き従ったからである。」22:17-18**

## サラの死と埋葬

それから30年近く経って、妻サラはカナンの地、ヘブロンで亡くなりました。127歳でした。わたしはその死を悼んで泣きました。実にさまざまなことがありましたが、ほんとうに長い間、苦楽を共にして歩んできたのです。

わたしはサラのために墓を用意しようと決意し、そこに住むヘトの人々に言いました。

**「私はあなたがたのもとでは寄留者であり、滞在者です。あなたがたが所有している墓地を譲っていただきたいのです。そうすればこのなきがらを移して葬ることができます。」23:4**

ヘトの人々はとても好意的でした。わたしは、ヘト人エフロンが所有する畑の端にあるマクペラの洞窟を希望しました。エフロンは無料で提供しようと言ってくれましたが、わたしはどうしても代価を払ってそこを取得したいと願いました。結局、わたしは銀400シ

ェケルでその土地を買い取りました。こうしてわたしはサラを、ヘブロンの前のマクペラの畑地の洞窟に葬りました。

**イサクの結婚とアブラハムの死**

老いたわたしには大きな心配事がありました。それは息子イサクの結婚のことです。神から賜った祝福を伝えて行くためにも、イサクにはふさわしい人をと願っていたのですが、それがかないませんでした。そこで家の財産のすべてを管理している老僕を呼んで、懇願して言いました。

**「私の生まれた地、私の親族のところに行って、息子イサクのために妻を迎えなさい。」4:4**

忠実な老僕は、わたしが主の声を聞いて出発した土地、ユーフラテス川の向こう、アラム・ナハライムに出かけて行きました。そこで彼は、一心に祈った末、親戚筋にあたるリベカを連れて帰ってくれました。けれどもそのとき、すでにわたしの齢は尽きていました。

聖書は、アブラハムの死と埋葬を次のように伝えています。

**「アブラハムの生涯の年数は百七十五年であった。アブラハムは良き晩年を迎え、老いた後、生涯を全うして息絶え、死んで先祖の列に加えられた。息子のイサクとイシュマエルは、マムレの向かい、ヘト人ツォハルの子エフロンの畑地にあったマクペラの洞窟に彼を葬った。その畑地は、アブラハムがヘトの人々から買い取ったもので、そこにアブラハムは妻サラと共に葬られた。アブラハムが死んだ後(のち)、神はその子イサクを祝福された。イサクはベエル・ラハイ・ロイの近くに住んだ。」25:7-11**

アブラハムの葬りを、イサクとイシュマエルの兄弟が一緒に行ったと記されているのは印象的です。後にイサクがその近くに住んだというベエル・ラハイ・ロイは井戸の名前で、かつてアブラハムの側女ハガルが神と出会った場所です（創世記 16:14)。その意味は「わたしを顧みる者の井戸」と言われます。

（2023/09/26　井田　泉）